

排水対策の徹底と適期は種で高品質・高収量の麦生産を実践！

1 ほ場の選定と排水対策

- 地下水位が低い排水性の良いほ場に作付けする。
- ほ場を団地化して、地域全体で排水性を高めることで効率的なほ場管理を行う。
- 水田では周囲明渠や弾丸暗渠による排水対策を徹底する。作業は土壌が乾いた状態で行う。

排水対策	方法等
周囲明渠	ほ場の周囲に幅 30cm、深さ 30cm をめやすに施工する。 排水口は周囲明渠の深さまで掘り下げ、確実に排水路につなげる。
ほ場内排水溝	播種後、ほ場の長辺方向に幅 20 ～30cm、深さ 30cm、3 ～5 m間隔で施工し周囲明渠に接続する。長辺が長い場合は、短辺方向にも施工する。
弾丸暗渠	深さ 35～45cm で、2 ～3 m間隔で施工する。 排水性の良いほ場では間隔が広めでもよい。

2 酸度矯正及び基肥

- 麦類は酸性に弱いことから、土壌 pH6.5 前後を目標に石灰質資材を散布する。
(消石灰で 100kg/10a 程度)
- 基肥量は下表をめやすに施用する。(大麦、小麦共通)

窒素	リン酸	カリ
5～6kg/10a	8～10 kg/10a	3～4kg/10a

3 種子消毒

- オオムギ雲形病、裸黒穂病等の発生を防止するため、温湯浸法又は薬剤消毒法のいずれかで必ず種子消毒を実施する。

消毒方法	消毒の手順
温湯浸法	初期の水温を、大麦は 42℃、小麦は 46℃とし、自然に水温が下がる（終了時約 30℃）ようにして大麦は 10 時間、小麦は 6 ～10 時間浸漬する。
薬剤消毒法	乾燥種子に適量の水を加えて種子表面を湿らせてから、登録のある種子消毒用薬剤を湿粉衣する。処理後は必ず風乾する。

4 耕うん・砕土・整地

- 出芽・苗立ちが安定するよう、砕土率（2 cm 以下の土塊の占める割合）を 70%以上に高める。砕土率を向上させるため、土壌が乾いた状態で耕うんピッチを小さくし耕うんする。アップカットロータリを活用すると表層の砕土効果が高くなる。
- 降雨の影響を避けるため、耕うん・砕土・整地からは種まで一日で終了させる。

5 は種

- 早期に有効茎を確保し、越冬前に十分な生育量を確保するため、適期には種する。

【は種期と越冬前の生育指標】

は種期	越冬直前生育量の指標
大麦:9/25～10/10	葉数 5 葉以上、乾物重 30g/100 個体 以上
小麦:9/25～10/20	〃 、乾物重 15g/100 個体 以上

- 苗立数 200 本/㎡ を目標に、苗立歩合を勘案し、は種量を調整する。

【は種様式とは種量等のめやす(大麦:ミノリムギ)】

は種様式	は種量 (kg/10a)	は種粒数 (粒/㎡)	苗立歩合 (%)	苗立本数 (本/㎡)
ドリル播	7～8	200～230	90	180～210
全面全層播	10～12	280～350	60～70	170～250
全面表面播	10～12	280～350	60～70	170～250

【は種様式とは種量等のめやす(小麦:ゆきちから、夏黄金)】

は種様式	は種量 (kg/10a)	は種粒数 (粒/㎡)	苗立歩合 (%)	苗立本数 (本/㎡)
ドリル播	8～10	200～250	90	180～230
全面全層播	12～14	300～350	60～70	180～250
全面表面播	12～14	300～350	60～70	180～250

- 収量・品質を高めるため、可能な限りドリル播とする。排水不良なほ場でドリル播を実施する場合は、畝立ては種とする。
- 土壌水分が高く、は種時の砕土が悪くなると予想される場合に限り全面表面播で行う。
- 砂丘地で土壌水分が低く乾燥が懸念されるほ場では、は種後に鎮圧を行う。

6 雑草対策

- ドリル播および全面全層播は、は種直後に土壌処理剤を散布する。その後に雑草が多発した場合は、茎葉処理剤を散布する。
- 全面表面播の場合は、は種直後の土壌処理剤散布は薬害が発生しやすいので避け、越冬後に茎葉処理剤を散布する。

7 秋期追肥の実施

- 湿田等で茎数が不足しやすいほ場では、越冬前の茎数確保のため、は種後 2 週間頃、遅くとも 11 月中旬までに窒素成分 2 kg/10a 程度の追肥を実施する。